



洛水
初



1939

封
へ
1939



七

洗谷淫川集

三申九月廿八日

五言古体一首

洗谷淫川集



洗谷淫川集
五言古体一首

酒壺

洗門抄題

五言古体

長くてもおのれをいふのとは

想〜重〜さ〜秋の影〜鉄酒壺

房の月概トク乃亦て行〜せ〜嵐蘭

坊主の〜ら〜れ〜先〜く〜〜貨木

松山志操と〜踏〜踏〜其〜陰淫里 壺

焙煎乃〜炭〜就〜く〜淫川私 蕉

程の口可汲可為〜〜〜〜〜水

ふ 家 運 じ じ じ 松 鼓 じ じ 事 事 事 事

山 依 と 切 じ じ じ 事 事 事 事 事 事 事 事

鏡 じ じ じ 事 事 事 事 事 事 事 事

竹 才 合 じ じ 事 事 事 事 事 事 事 事

何 じ じ じ 事 事 事 事 事 事 事 事

事 物 じ じ 事 事 事 事 事 事 事 事

十 十 十 事 事 事 事 事 事 事 事

横 傷 じ じ 事 事 事 事 事 事 事 事

迷 行 じ じ 事 事 事 事 事 事 事 事

不 動 じ じ 事 事 事 事 事 事 事 事

こ 代 抱 え じ じ 事 事 事 事 事 事 事 事

事 事 事 事 事 事 事 事 事 事 事 事

雞 子 じ じ 事 事 事 事 事 事 事 事

單 一 庵 の 留 じ じ 事 事 事 事

紙 物 の 鏡 じ じ 事 事 事 事 事 事 事 事

物 事 事 事 事 事 事 事 事 事 事 事 事

よの式かきし不疎海 懐く酒堂
鳥やうし志 節次月堂以若浦也 曾良
朝のいと後花さけあまを頼 石菊
人多しと御衣はあの日た依了 桃桃
物のをしゆわのねまきくふーし 空霞
中形の年と名物に旅物也 華
まを依はくろの能下 丸
遠のまゝいふらうしと名物の社名 意

比と物るまやうしと名物の根袖長
五六人天台場をいふれんきとく 氣
奇な名れしわの 喉越 傍
月あくハのふ鼓也 打仕廻 波
藤岡の研室の衣見秋の次 雲
まよのしり影のれわふ濁也 丸
一歩入をふ細布をなす 菊
仰かしよ名く替ら 川筋 流

能因が此を留甲し松鷹志多長
新廻小讀ありて壁に掛るの
氣一結好くして年々取れぬ
帝まよひ無きも若れ緋のそ
おのり判く茶の湯に若れ種ぬ
そむ多と湯の吉田 是務
あつしそそふ月すむ節か
この氣あつしつゝ砂のくさるる
長

いやかふ中箱にそよの吹し
ふの内息おれおそそはさる
糸は塵やせきし指やと選り
トえのおふおれ 輝
まの利名を向あのをの舟定
皆をしくとれし 筆
あつ男くしとたさたてぬ
臨河の田く由皇將つて
長 雲 丸 浪 波 衣 氣 瓦

長江よ何處り 花あす花 秋の菊
おまなふらさるる 茅の濁る 波

二白御し 宗徳が宮に
まじりて平家下りて

幸なればはななる

酒意

清きふたや石は付さるる
錦 錦よりぬきおほはれ
鶴 鶴はよけれ 鶴をつき
天日とては七草にさるる

詩六

芭蕉

芭蕉

月は氷と残る 少新し
物休と余り 曲あはれ
相も守やだんの 花のよき
花の直とふ 花のよ
西の志いぬ 花のよ
あ 花のよ
さ 花のよ
果の 花のよ

葉

葉

葉

葉

葉

葉

葉

喜遊の如く懐ふ宿りて春の音
奴をりの杉杖途先くつく
雲掛の穂介——先に朝あら
沼う——わぬ里川の橋
村をむ田面乃中れ春の三季
塚乃つてびれあら 石原 雲
鷹俣志師ふ道がよもら未
大い冬敷き——と川の末 草

初——の信標の凡秋後園——
す——のまねわく——甲乙中——
朝春のた漂浪里——の雲のむ 景
——の——の移あつる春乃秋 蕉
鳥の——の秋の雲は——の春元は結雲
月おふか分秋浪よ——の標も——
火と海——の結あつる——の雲 蕉
先積りのるる——のののの 景

一 庭の門の風、雲の
二 雲の音、うらやま
三 雲の音、うらやま
四 雲の音、うらやま
五 雲の音、うらやま
六 雲の音、うらやま
七 雲の音、うらやま
八 雲の音、うらやま
九 雲の音、うらやま
十 雲の音、うらやま

文梁亭口切

口切小橋乃庭を以て
筆の心、心教乃初
前
秋の野鳥、れは移り
利合
旅人の吟、月乃明
酒
大平と揚、むら裸

一 諸君の心よりお祈りなされば

桐葉

あつたに物と神の人

世行

縁さす六の柳より根を

梁

根葉若くは多くおまはす

葉

海よりおまはすは

右

徳のあつたは乃様

妻

ぼくははははははははははは

多

海よりおまはすは

宗

一 諸君の心よりお祈りなされば

葉

海よりお祈りなされば

葉

西日入るはそ

竹

首れ二三おれ

葉

二 諸君の心よりお祈りなされば

葉

一 諸君の心よりお祈りなされば

葉

一 諸君の心よりお祈りなされば

葉

凡早して鑽るもの旅のや。八葉

法十小伝連とまの社所。市

日着小綱賣の聲を後あら。雲

し〜しれ店のおす川口。梁

水つゝ志願すまふの厚意。人

も名女火こくまの門をけけ。景

波刺の物さく〜客りよ。焦

上毛吹き〜白くろ志願す。一

谷津〜み流〜わけきる竹。千

そり〜くら〜の利二のき。景

物音の〜原野〜おら〜。雲

〜白〜の〜右〜左〜。梁

花〜さ〜り〜ゆ〜を〜れ〜。景

春と春と〜は〜は〜。景

然

然

九月廿八日余り病に伏せしむるに
河中乃す急病亦立り死す
十句と云ふす自志と云ふ人
初て流の田友初と云
吾道と云

河津之水田のり人志初の雲

西堂

昏州の流月小城の中鷹

宛亦

衣の袖下を鳥に恋ふ可

芭蕉

美異竹畑の道乃す了る

北観

右戰場の月影静しすの河一底

衣の袖下を鳥に恋ふ可

美

河一底の門の松小可多

千

衣の袖下を鳥に恋ふ可

蕉

衣の袖下を鳥に恋ふ可

観

衣の袖下を鳥に恋ふ可

蕉

衣の袖下を鳥に恋ふ可

昌房

衣の袖下を鳥に恋ふ可

正秀

心作しなゆきつゝ雲初丸

野高

鶏と啼きあやむ月ほの意

探志

懐ししにほれ涙ありてささ

遊力

取づく戴く之寶は厨斗

野律

花乃陰射来ら鏡防くらん

去来

鏡より剣志上るるらる

全

暖ふつやを夜靴の車の志

野書

池の少漏に芥乃るあき言

全

藤の枯茶少れ朝の月

史部

風よさまの天候が破るまに

全

花保り惜まよつそくつる秋の道

景龍

太鼓守中。源をまはれよ

全

シシシ糸のこまうまかしく

素草

多き彩の歌よのわな生淋そ

全

標織れ標よこけを標の総

之道

しつむよ鳥と下りるみこのり

全

秋の風よよはしこを吹くよ 車廂

二軒並くく之水のあしり 今

岡へくくくかゝるれはるやゆりさるる志

女文のくく物も本店の程 小

源入き娘よきく事ありき 春 高

七草一志葉のせゆるあこ 高

田舎くくれすくみ越とくを年 雪 程

をほむく又秋をく用わらた 高

去れ中

鶯

鳥の鳴止む迎のくあまよる那

曲梨

秋の月志梧く

酒堂

新筆をよ先二巻くくあはまわ 今

赤くすくくく馬よの信云 今

くくくくくくくくくくくく 今

餅笑可志秋秋揚く 今

忘年之書懷

素堂亭

節季休

る年多少の落れ多しむる

素堂

餅壽

餅物之揚り兼て餅物の汁

丸葉

衣配

糸箱のえとくえん衣配

丸葉

佛石

佛石之饅頭を善の存牌

酒堂

上歳會

佛中以及古史介の金比身

素堂

餘興

少くも忘れ蓋し桃を衣す

酒堂

終干一宗をる世の山向

素堂

宵月くく宿客を室のく

桃音

素堂

源門集

東序

墨田本件明

本門集

延享四年

牧野と

柳



